

# 不妊治療現場の過去・現在・未来

連載 6

## ～選ばなかった選択肢～

荒木 晃子

### 友情と代理出産

「そういえば・・・」会うなり、B子さんは語りはじめた。彼女から話を切り出すのは今回が初めてだ。

「不妊治療をはじめて何年か経った頃だったかな・・・親友のC子が、あ、まだ話してなかったかしら？私には中学校時代からの親友がいたの。でね、彼女にだけは、結婚した後も子どもができなくて悩んでいることを打ち明けていた。ず～っと、“だれにも言えない話”を互いに相談しあう仲だったから、彼女にだけは話せたのかもしれない。そういえば、その頃の私にとって、不妊の悩みを話せる唯一の友人だったかもね。で、そのC子がある日私にいったの。『B子の代わりに子どもを産んであげようか』って。ね？すごいでしょう？！彼女の運転する車に乗って、二人で出かける車中だったと思う。助手席でそれを聞いた私は、驚いたのなんのって！おもわず、そんなことできるわけじゃない！って、大きな声で笑いながら返事したのよ！」

「え？！笑いながらですか？」間髪をいれず、そう聞き返した自分にも、さらに驚いた。リフレミングというより、反射的に思わず口走ったというほうがふさわしい。20年ほど前のそのやり取りは、まさに、今でいう代理出産と同様の発想ではないか。瞬時に、私のなかでは、頭の中にあるB子

さんの履歴ファイルを見直す作業が始まっていた。ファイルといっても、実在するファイルではない。

普段、精神科と生殖医療の病院心理士として面接する際には、カウンセリングとは別に、医師による医療カルテが作成される。精神科の心療カウンセリングは、精神科診療の通院精神療法という保険診療項目にあたり、医療保険適用のカウンセリングを約60分、（一般よりは）安価で提供することができる。これまで10数年間実施してきた、数えきれない数のクライアントとの面談のなかには、要約筆記され心療カウンセリングカルテとして保管されているものもある。そのほとんどは、精神疾患の診断がおり、治療のため精神薬の投与を受ける患者のものだ。さらに、医師による医療カルテと心療カウンセリングカルテとは別に、一人ひとり個別の履歴ファイルに保存されているケースがある。精神疾患の診断名がつかず、精神薬の投薬の必要がない、もしくは、一時的な投薬のみ必要と診断された、心理カウンセリングレベルの患者のものだ。大切な個人情報に詰まったそれを、私は“記憶のファイル”と呼び、必要に応じ、実際に面談するその個人と向き合うときに限定し、記憶の棚から取り出し、開くことがある。いま、私は、開いていたB子さん用ファイルのトップページへ戻っていた。

B子さんの“記憶のファイル”によると、1983年国内初の体外受精児が誕生した同年、

結婚後数年たっても妊娠しない彼女は、通院を始めた、とある。彼女が語ったエピソードは、その頃、もしくはその後の出来事なので、おそらく一般の産婦人科医院から不妊治療専門クリニックへ転院したころのものだろう。もしかすると、転院のきっかけになった出来事を語っているのかもしれない。ふと浮かんだ疑問を“記憶のファイル”のクリップボードに留め、いますぐ、彼女に確認することは控える。聞き手のききたいことが、話し手の話したいこととは限らないからだ。おもいが頭を駆けめぐるなか、「え?! 笑いながらですか?」と返した私に、「そう! 笑いながら、よ!」、さらに大きな声でB子さんは即答した。「そうねえ、いま考えても、びっくりするくらいの発言だったわね。まさか、“かわりに産んであげる”とは・・・フッフ、さすが親友のC子ならではの、なんとも・・・ねえ?」いたずらっぽい視線をチラと私に向けたのち、嬉しそうに口元に笑みをたたえ、「きつと・・・そうね、おそらく、C子にとっては、他人事ではなかったんじゃないかな、私の悩みが」そう語り終えた彼女からは、すでに笑みが消えていた。「中学生のころから進学のことや好きな男の子の話、友人関係の悩みとか体の悩み、何でも話せる関係だった。失恋したときや結婚を決めるときも、互いに自分のことのように一緒に考えてきた仲だったから。でも、こればかりは・・・いくら親友でも、かわりに産んでもらう、という発想はできなかったわね。だけど、(C子の) 気持ちはうれしかったなあ、うん・・・でしょう?」同意を求めようなしぐさで首を傾げた彼女を見て、「ちがう。何かが違う」そう思った。確かに、目の前にいるB子さんの語りとその表情に違和感はない。彼女にとって、親友と過ごした思い出は、多感な青春時代の大切な1ページに違いない。しかし、“かわりに産んであげる” — この親友のひとつことが彼女に与えた(であろう) 衝撃について、いま、敢えて問いなおす必要はないのだろうか。聞き手が話し手の話を肯定的に聴く、とは、決して、すべての語りに同意・同調することではない。特に、話し手が聞き手の同意を求める際には、慎重に反応することも大切だ。

現在では、第三者の関わる生殖医療技術により可能(日本では規制する法律はない)となった代理出産を、自ら望んで請け負おうとする友人の存在が、かつて、B子さんにあったのだ。

以前、本稿連載②「生殖革命の時代」文中の「今日のトピックス」に、第三者から提供された卵子を用い、夫の精子と体外受精で妻が妊娠し出産したケースを紹介した。ほかにも、最近、特に2008年以降、日本国内での治療を断念し、アメリカや韓国、インドやタイなどへ渡航する不妊当事者カップルが増加しているという。以上は、海外で精子・卵子の提供を受け、代理母による代理出産で誕生した子どもに関する調査報告により明らかとなった(朝日新聞2011.2.19朝刊)。報告によると、インドやタイでは2008年以降、少なくとも30組の日本人夫婦の依頼で、10人以上の子どもが誕生していたという。この背景には、同年、「妻の同意なしに、インド在住女性の代理出産により誕生した夫の子どもが無国籍状態となり、一時出国できなくなった問題」が大きく報道されたことがある。その後、子どもの出国は認められ、夫との特別養子縁組が成立した。夫婦は、その後離婚に至っている。

いつの時代も、やはり、生殖医療にはトピックスがつきものだ。“かわりに産んであげる” — B子さんと親友との友情は、いまなら、生殖医療技術を用い、“子どもの誕生”という違った形で実を結んでいたのかもしれない。“かわりに産む”という発想は、代理出産という生殖医療技術により実現された。彼女は当時、それを選ばなかっただけなのだ。その後、今日に至るまで、代理出産により誕生した子どもの数は、少なくとも百数十例以上あることが明らかになった(代理出産の法整備を進める超党派勉強会『代理出産の現状及び問題点』参考資料 根津八尋2010.4.27衆議院第2議員会館)。B子さんが選ばなかった選択肢は、いま、現実のものとなっている。

## カリバラ

今でいう、代理出産の申し出を、なぜ、B子さんは選ばなかったのだろう。

その当時、代理出産という代名詞が日常的に使用されていたとは思えない。しかし、日本では昔から、借り腹（かりばら）と呼ぶ、夫が妻以外の女性と性的関係を持ち、その女性が産んだ夫の子どもを、妻が実子として育てるケースも稀ではなかったという。妻である女性も、子どもを産んだ女性にとっても、いずれも屈辱的な体験であったはずだ。少なくとも、私はそう思う。B子さんにたずねてみた。

「カリバラ？あぁ・・・知ってる。（しばし沈黙の時間が過ぎる）そのことも、いつか話せる・・・かもしれない。いつか、そう、そのうち、ね」意味深なことばを残し、疲れたようにつぶやいた。これも、記憶のクリップボードに留めておかなければ。そのうちB子さんが語る、その時の為に、その歴史的背景も知っておきたい。いや、知ることなしに聴いてはいけないのだと思う。生殖医療技術がまだ普及していなかった時代、生殖医療ではない選択肢を選び、不妊当事者たちが生き抜いた歴史なくして、現在の、そして今後の当事者支援は構築できない。それは確かだ。彼女との対話が進むにつれ、自分自身に課せられた大きな課題が浮かびあがる。それは、おそらく私だけのものではないはずだ。家族をつなぎ、命をつなぐことで刻み続けた歴史が、“いま”をつくったのだから。

B子さんとの会話は、いまのところ終わりが見えない。彼女が生きた50数年間の人生に、しかも、成人し生殖年齢といわれる30年に満たない時間のなかに、いったい、いくつものエピソードが詰まっているのだろう。次々と増えていく“わたしが聞きたいこと”を、まずはひとつずつ整理することから始めよう。B子さんの力を借りて。

### 背中合わせ

前号連載⑤の文中（生殖革命の物語エピソード2「妻以上母親未満」）、提供精子で子どもを産むことについて、彼女は「（前略）夫以外の子どもを妊娠することなんて考えられない（後略）」と語った。今回初めて、会うなり、自分から語りはじめた内容は、親友との思い出。それは、今でいう代理出産とつながっていた。そこから、代

理出産の原点ともいえる、仮腹という日本古来のゆゆしき慣習を私から提示したことで、さらに、ふたりの対話が新たなステージに移っていく。確かに、そんな予感があった。でも、なぜ、いま彼女はそれを語るのだろうか。そこに戻らなければ、そう、確信した。

“親友が私をおもって言ってくれたことばに驚き、同時にうれしく思った”彼女はそう表現した。はたして、それだけ、なのだろうか。この疑念を晴らすずに、このまま話を聞き続けることはできない、そう感じた。

話し手の語りは、例えそれが事実であろうとなかろうと、どこかに話し手の真実がある。その前提に、私はこれまで話し手と向き合ってきた。しかし、ときに話し手を疑うことが必要な場合もあった。起きた出来事に対する、話し手の反応・感情・捉え方など、その認知に違和感を覚えた場合がそれにあたる。親友のことばに笑って答えたB子さんに、その“笑い”について尋ねてみた。

「ん？あぁ、あの時なぜ笑ったかって？そうね・・・」私に向けていた視線を落とし、右手を自分の胸に当て、しばらく考え込んだ様子を見せた。「そう、突然いわれたことだったから、その場では、さらっと聞き流した感があったかしら。“かわりに産む”なんていう発想に、とにかくびっくりして、咄嗟に笑ったって感じかもね」ふっ、と小さく鼻で笑い、左の口角が上がったまま話しは続く。「いま考えると、なんかフクザツな気分かな？きついつか子どもを産めるんだ、って信じて不妊治療を受けていたんだから。信じたい、信じなきゃ、って。でなきゃ、（体が）痛い・（金額が）高い・（こころが）辛い不妊治療は続けることができなかつたと思う。みんな、そうなんじゃないかしら？不妊治療って、いつかきつと自分も（妊娠できる）、って信じることができなきゃ、続かないと思う。その途中で、かわりに産んであげるって言われても、その頃の私には、“ありがたいけど余計な親切”程度にきこえたのかもしれないわね。だって、独身の時とか、妊娠する以前の、“不妊のことなんて考えたこともない時期”に、『自分の子どもを他人に産んでも

らおう』なんて発想、誰にもないのではないかしら。前にも言ったと思うけど、だれも、自らのぞんで不妊なんか経験したくない。どの人も、なりたくて不妊になったわけじゃない。それでも不妊治療を始めたのは、あくまでも“自分ノ子ドモヲ自分デ産ムタメ”。最初から、自分で産みたくないから、だれかに産んでもらおうなんて、考えるほうがよっぽど問題だとはおもわない？」なるほど、もっともな意見だ。私はただ頷くしかなかった。「それにG子は、いつも私の体を心配してくれていたし、『そこまでしなくてもいいんじゃない？』って、忠告もしてくれてた。そんな彼女のことがばだから、笑えたのかもしれない。私の為と言ってくれているんだって、本当にそう思えた。だから、うれしかったんだと思う」B子さんは、親友が“自分をおもって言ってくれたことば”と受け取ることができたのだ。

通常、不妊当事者の悩みは多様で、かつ深刻だ。そのような、不妊当事者特有の心理状態を不妊心理と呼び、なかでも、対人関係に問題や障害として、強く影響を及ぼすといわれる不妊心理には、大半の当事者が困惑する現状がある。対して、不妊現象にある当事者心理の解明は、いまだに進んでおらず、当事者が自分でコントロールする以外に手段はないといわれている。生殖医療を熟知した医療者であっても、例え、心理学の専門家であっても、解明できていない心理状態に対しては、その対処法などを提示することは難しい。その解決手段を説いた文献や資料が存在しないのだ。結果、だれも支援策を持たないに等しいということになる。自身の不妊体験に援助者もなく、次々に起こる様々なエピソードを自分なりの方法でやり過ごし、その体験を、いま振り返るプロセスに、B子さんが残してきた課題は膨大な量にのぼるのかもしれない。ならば、納得するに十分ではないが、いま、あえて、この問題を掘り下げることが避けよう、そう判断した。彼女は、思い出の書き換えを望んでいるのではない。しばらく、親友との思い出を愛しむように話す彼女のその穏やかな表情に、ふと安堵をおぼえた、その直後だった。

「実はね！」唐突に、B子さんが切り出した。「その日、家に戻ってから、ひとりで思いっきり泣いたのよ！」きっぱりと、そう言い切ったB子さんに向かって、えっ？と、聞き返した私の目が、「なぜ？、どういうこと？」と、彼女に問いかけたに違いない。「うん・・実はそうなの」私の気持ちを察するかのようにならずき、はなし続けた。「ほんとは、だれにも言わずにおこうと思っていたことなんだけど。この話をしていて、思い出したの。その時のフクザツな気持ちを。確かに、G子の気持ちは嬉しかった、それは間違いない。でもね、“かわりに産んであげる”って、言われることは、よ〜く考えると、“もう、私には産むことができない、ってこと？”になっちゃうのよね。その頃はいつも、ひとりになると、そんな風に考えてしまうことが多かった。なんか、まるで被害妄想みたいだし、誰もそんなつもりで言ってないことは分かっているの。何故そうなるの？って、聞かれると答えられないんだけど、その頃は、何でもそういう風に聞こえてしまったの。変よね？」決して変ではなかった。それが不妊心理なのだ、そう思った。「ある時、小さい子を連れて遊びに来た子育て中の知人女性から、『子育ては大変よ〜！うちは3人もいるでしょ？もう、いらない！って思う時があるの。どれか一人もらってくれない？私なんて、子どものいない頃に戻りたいって、いつも考えてるもの。子どものいないあなたがうらやましいわ〜』って言われても、ちっとも嬉しくなかった。だって、子どもができなくて悩んでる人に対して、いくら子育てが大変だからといって、“イナイ貴方ガウラヤマシイ”と言われて、喜ぶ人はいないと思う。それに、子どもはほしいけど、誰でもいいわけじゃない。それに、その気もないのに、簡単に“要らないから子どもをあげる”って、その子の前でいう親にも腹が立ったしね！そういえば、誰かに何か言われるたび、よく腹を立てていたわね〜あの頃は！」珍しく声を荒げ、一気に話し終えるうち、いつの間にか、いつものB子さんの笑顔は消えていた。「その頃は、ほんとうにフクザツな気持ちだったんですね」、そう返すのが精いっぱいだった。全身で怒りを表現しているように見

えた彼女を、「怖い」と感じていたからだ。「あ？ごめんなさいね。決して、あなたに怒っているわけじゃないのよ〜」やっと返した私のひとことに、しまった！と言わんばかりに、少しあわてた様子で、にっこり笑って謝罪のことばを添えた。

B子さんは、その頃の怒りをいまも忘れてはいない、そう感じた。そうだ、以前にも、同様の出来事が私たちの関係に起きたことを思い出す。彼女がかつて言ったことば。「(前略)悲しくて、苦しいの。悔しくて、悲しいの。こんなに悲しいことが、この世の中にあるのか！って信じられないくらい、悲しかったの」この意味が、いま解りかけた気がした。悲しみと怒りは、常に背中合わせなのだ。そして、彼女はこうも言っていた。「(前略)もし、あなたからみて、私が辛そうに見えるならば、それは、その頃の私の姿だと思って頂戴ね。私は、いま、あなたにきいてほしいと思ってるの。誰もきこうとしてくれなかった話を(後略)」さらに、きき続けなければ。彼女はきいてほしいのだ。

## 回想

「そういえば、以前、『もし、あの時、C子が私の子どもを“かわりに産んでくれていたら”どうなっていたら』って考えたことがあった。そう、あれから、もう10年もたつたよね、C子が亡くなってから」遠くを見つめ、まるでひとりごとをいうように彼女はつぶやいた。一瞬にして体に緊張が走った私は、目を見開き、無言のまま微動だにせず聴き続ける。「C子はね、結婚して3人の男の子がいたの。知的障害児が通学する養護学校の教師をしていた。ご主人と共働きしながら、障害を持つ子どもたちを、自分の子ども以上に可愛がってたなあ」顎をあげ、視線は空を仰ぐ。彼女のこころは、いま、ここには無い。「養護学校の遠足や運動会に、自分の子どもたちも連れて行ったりして・・・ほんとうに子どもが大好きだったんでしょね〜破天荒なところもあったけど、おおらかで明るい女性だったのよ。その彼女に悪性腫瘍が見つかったのが40歳を過ぎたころだったかしら・・・何度も手術を繰り返したけど、その

たびに転移が見つかって、最期には悪性リンパ腫、つまり、血液のガンよね？になって・・・骨髄移植も受けたんだけど・・・結局亡くなってしまったの。44歳の誕生日を迎えたころだったかしら・・・私の同級生だから・・・」間違いなく、涙をこらえているのがわかる。私は銅像のように、ただそこに座っていた。「思い出せば切りがない。いつも、そう。いくら悔やんでも、誰も、何もできなかった。それは分かっているんだけど、やっぱり悲しい。彼女が亡くなった時、一番下の男の子はまだ小さくて・・・残された子どもたちにもご主人にも、かける言葉がなかったのをおぼえている。ねえ、私になぜ、いま、あなたにこの話をしたかわかる？」わからなかった。理解できるのは“子どもをかわりに産んあげる”とまでしてくれた親友への回想、ということだけだ。私は、B子さんから視線を離さず、首を小さく左右に振った。

「わたしね・・・C子のことを思い出すたび、いつも思うことがあるの。ああ、あの時、『かわりに産んでもらわなくて良かった』ってね。不思議でしょ？」不思議というより、まだ、話の趣旨がつかめていない。「もし・・・もしも、あの時、かわりにC子が“私の子どもを産んでいた”としたら、きっと私は、いま頃後悔してもしきれない気持ちでいたと思う。だって、女性が子どもを産むって、命がけですもの。子どもを産んではいないけれど、それくらいは分かる。その大切な命をかけて、もし、私の子どもを産んでいたとしたら・・・それが、彼女の死期を早めたんじゃないか。それがなければ、彼女はもっと長く生きられたんじゃないかって、きっと、後悔していたと思う。いま以上に。それと・・・」何か言いかけて、顔が曇った。「それとね、これは本音なんだけど・・・もし、彼女に“私の子ども”を産んでもらっていたら、その子に彼女の死をどう伝えただろうか、って。そして、私はおそらく、彼女の死によって、“産まれた子どもを失う恐怖”に襲われたらどう思う。素人考えだと思ふかもしれないけれど、その子を産んだ母体の影響は、考えなくとも、拭おうとしても、しきれないほど付きまとってくるもんだと思うの。DNAにしても、C子が死んでしまったという

事実にしても。ずっと、その子に残る・・当然よね。その子にとって、それが真実なんから。それに、例え、“かわりに産んでもらった”としても、産まれた子に対して、“あえて、そのことを告げる”ことはしなかったと思う。もし、言うことができて、『この人は私たち家族の親戚なの』くらいだったかな。なにを、どう考えても、あの時の私の決断は間違っていないと思う。いまとなつては、大切な思い出ね～C子へのおもいと共に」静かに、そして確かに、B子さんの語りが自分に浸透していくのが分かる。ほんの少し前に感じた「B子さんのこころは、いま、ここには無い」といった感覚は消え、いま、私のなかに“そのおもいが流れ込んでいる”体感覚を覚えた。「そう、このことを考えるたび、私はなんて自分勝手なんだろう、って。かわりに産んでくれるとまでいった彼女に対して、その最期を知っているからこそ、親友だったからこそ、おもってはいけないことなのに、“やっぱり、かわりに産んでもらわなくてよかったんだ”って思う。いい意味でも、悪い意味でも、そう思うしかないのかもしれないけれどね」泣き笑い—その表現はふさわしくない。悲しそうな瞳が涙のなかに浮かんでいる。いまにも泣きだしそうな口元はほころび、まるで微笑んでいるかのようにも映る。私のポキャブラリーでは、これ以上、目の前の彼女を表現することはできないし、ことばも浮かんではこない。ただ、「彼女を映す鏡になりたい」、こころからそう思った。

次号へつづく

#### <世界のトピックス>

京大の研究班が、マウスのiPS細胞（人工多能性幹細胞）から精子を作り、卵子に注入（顕微授精）し、生殖能力を持つ成体へと成長するマウスの子を誕生させることに世界で初めて成功した。今後は同様に、卵子や精子幹細胞の作成、サルなどを使った研究にも取り組むという。日本では、昨年5月まで、ヒトのiPS細胞などから生殖細胞を作ることは禁止されていたが、“受精させないこと”を条件に解禁されたという（2011.8.5 毎日新聞朝刊）。

いつか、科学がヒトの生殖の代理手段となる日が来るかもしれない。その時、あなたはiPS細胞で自分の精子・卵子をつくりますか？